猿蓑集

目次

解説……巻頭
其角序……一
巻之一……七
巻之二……三
巻之三……元
巻之四……三
巻之五……三
巻之六——幻住庵記——……四
跋……二七
補註……三〇

○古今にわたりて—標注七部集に「古ハ宗鑑守武貞徳宗因ノ時代ヲサシ、今ハ貞享元禄ヲ云」。三駱七部解に、古今にわたりてといへるは、俳諧の古今集なりといへる事を心にこめて云ひ出したりと。

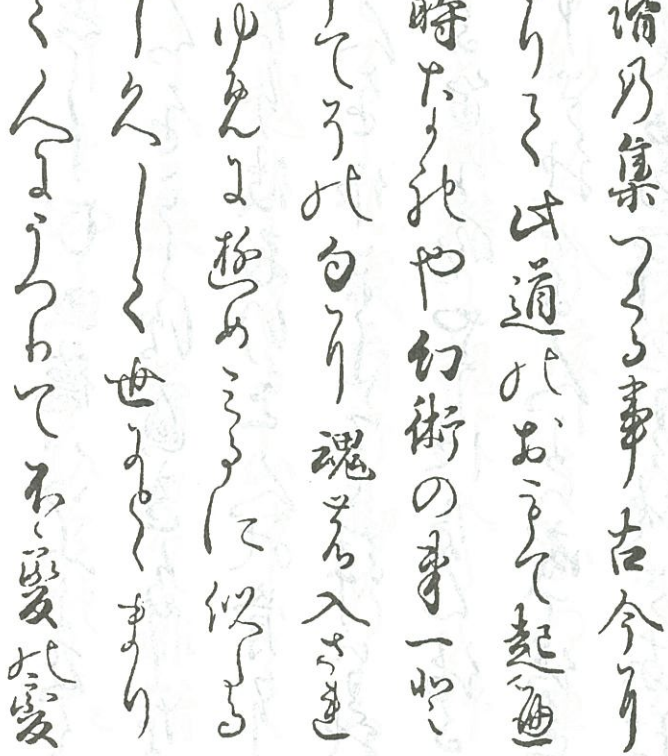
○おもて起—面目を高める意。用例、本集夏巻頭に「有明のおもておこすやほととぎす」(其角)。また芭蕉葉船に「此序晋子が名をかりて実は翁の稿なりといふ」との説を挙げたれど従ひ難し。此の語長嘯子が挙白集、さが衣の中、秀吉の歌を述べし条に「やまと歌とのませたまふおとゞにて、春秋の色にふかうおもひしみ、をりにつけたる御ロずさみ、こゝら世にとまりけん。まことに月花もおもておこすべき時なれや」とあるに拠れるならむ。うつぼ物語にも「この子はわがおもておこしつべき子なり」と有。

○幻術—後に「俳諧の神を入たまひければ」とあるに相応し、俳諧として句に芸術的精神を宿すを云。

○ゆめにゆめミル—千載集「旅の世にまた旅寝して草枕夢のうちにもゆめをみるかな」(慈円)。

○久しく世にとゞまり—七部通旨に「其幻術のしるしを云へは此道の流行して久しく世上にとゞまり長き世の末までも人にうつりて地に落す云々」。

○不変の変—不変は不易を言ひ変は流行をさす。芭蕉の所謂不易流行説を云。＊



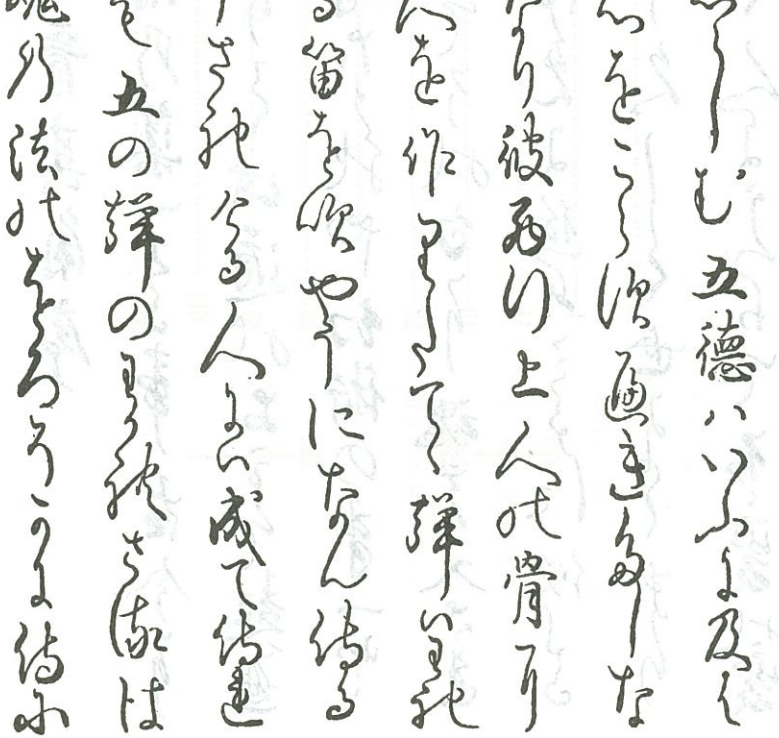
○五徳―七部大鏡には、徳元の初学抄などにあげし五徳にはあらで、こは温良恭倹譲の五徳なりと云へど、誹諧初学抄（寛永十八年刊）の説は当時汎く知られゐしものと思はるれば大鏡の説却って従ひ難し。抄に云、「誹諧にハ連歌の徳の他に、五つまさりたるたのしミ侍るとかや。第一、俗語を用る事、第二は自讃し侍てもおかしき事、第三、取敢へず興をもよほす事、第四、初心のともがら学ひ安くして和歌の浦なミに心をよせ侍る事、第五には集歌古事来歴分明ならすとも一句にさへ興をなし侍らば何事をもひろく引よせて付侍るへき事、是五のとく也」。成美が随斎諧話（文政三年刊）にも「其角が猿蓑集の序に、五徳はいふに及ばずと書しは此事也」とて右の文を引用せり。

○たしなみ―芭蕉の風雅道をさす。

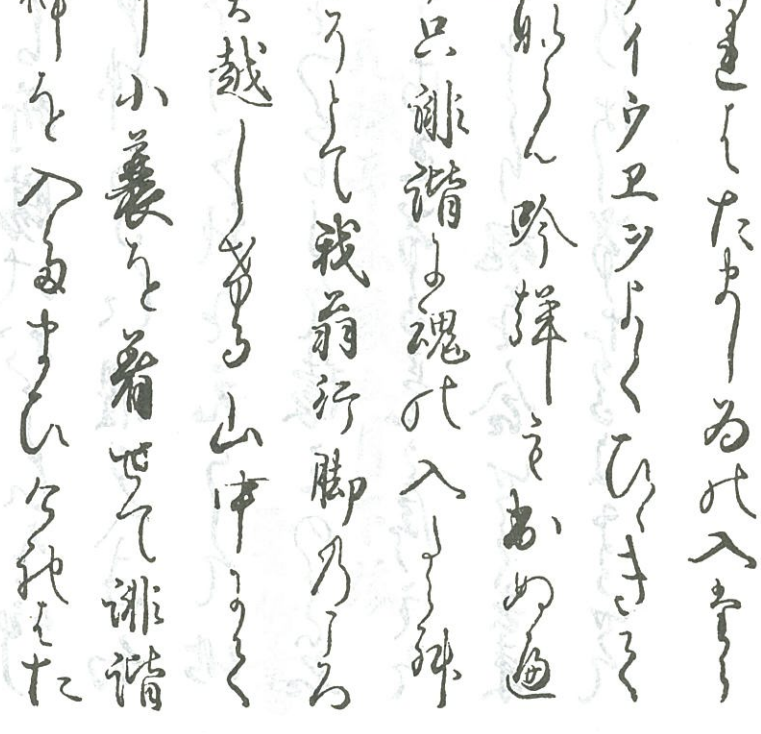
○骨にて人を作り―＊

○五の声―五十音図の各行の五つの音、後文に「アイウエヲよくひゝきて」と有。

○反魂の法―死者の霊魂をよび反すといふ密家の秘法。



○アイウエヲ―アイウエオ。前文「五の声」とあるを受く。許六の篇突（元禄十一年刊）にも「今めかしきニ似たれ共、大和ハ哥建立の国なれば、風声、水音、一昼、一夜の呼吸の数皆哥也。三十一もじの数と云ニはあらず。万物の上ニ訓ンを付て、箸、橋、端の三ツをよくいひ分侍るハ、アイウエヲの五ツのひゞきより出て、一切此ひゞきニもるゝ事なし」と有。

○伊賀越―大和より山城の笠置を経、伊賀の上野、柘植に出で、鈴鹿関に通じたる道を行くを云。ここは単に、国境の山を越えて伊賀に入る意に用ふ。かの芭蕉の「初しくれ猿も小蓑を」の句を得たるは、元禄二年のこと。此とし「奥の細道」の旅後、九月十三日外宮の遷宮を拝し、十五日なほ路通と共に山田に居り（曽良随行日記）、二三日久居に滞在（芭蕉翁全伝）、それ故伊勢より山越して上野に帰着せるは九月二十日前後の事なり。

○猿に小蓑を―本文巻頭句の頭註参照。真蹟色紙に「あつかりし夏も過、悲しかりし秋もくれて、山家に初冬をむかへて」との前書あるものあれど、この芭蕉の例の虚構にて、山中の詠なるべし。